

〈周縁的読書活動〉における「個体」的あり方について ——『バーナード嬢曰く。』に見るテクストの快楽

新妻 千紘

はじめに

「読書家に憧れるけど読書がメンドくさい。」

これは、漫画『バーナード嬢曰く。』に登場する主人公、町田さわ子の読書に対する基本的な態度である。どうしたら本を読まずに読了感を得ることができるか、あるいは、本を読まずにいかにか読書家らしく振舞うかを日々追究し続けることが彼女のライフワークであり、漫画では『シャーロック・ホームズ』のDVDかなり繰り返し返し観たからそろそろ原作も読んだことにしちゃっていいんじゃないかな²』という可愛げのある発言をしたり、「二度読んだらもう二度と読む前には戻れない。読む前のワクワク感を失った人に対してはむしろ優越感を覚える³。」という、もっともらしい言い訳を残したりしている。

漫画において、町田さわ子を取り囲む三人の登場人物がいる。

「ひと昔前に流行った本を古本で買うのがシユミ⁴。」という遠藤君、「小学生の頃からシャーロックアンを続けて約10年⁵。」と

いう長谷川スマカ、そして「ガチの読書家。」でありSFに入れ込んでいる神林葉である。全く異なる趣味を持つが故に関わりを持たなかった四人であるが、「読書家ぶりたい」と日々試行錯誤する町田さわ子に叱咤を加えたり、助言したりするうちに、自然と各々の読書について語り合うようになって行く。

読書に対して最も怠惰な姿勢を持っていると思われる町田さわ子が存在しなければ成立しえないこのような読書活動の場を、我々はどうのように理解することができるだろうか。この漫画は町田さわ子の成長物語ではない。終始一貫して本を読まずに読んだことにする方法を模索し続けている彼女であるが、どういうわけか読書家たちを惹きつけ、読書の楽しみを語らせてしまう。そして終には、「読書家ぶる」ことを目指す町田さわ子と自分たちはそう変わらないのではないかと疑問まで抱かせてしまうのである。

本稿においては、読了を指さない読書という町田さわこの読書活動は、なぜ読書家たちを魅了し、終には自らと同等であ

ると認めさせてしまうのか明らかにしてみたい。恐らく、町田さわ子の読書に対する独特の姿勢には、それを目にする人々に向けて、「読書とは何か」「読書における楽しみとはどういうものか」という問いを誘発する何かが含まれているはずである。したがって、まずはこのような問いを明らかにすることで、読書における我々の楽しみが何によって支えられているのか考えてみたい。

第一章 漫画『バーナード嬢曰く。』における町田さわ子が果たしている役割

(1) 町田さわ子の強固なこだわりに見る主観性の現われ

まず、町田さわ子自身が読書における楽しみをどのように捉えているか、彼女独自の読書活動の実態を見ることで検討していきたい。漫画『バーナード嬢曰く。』の冒頭は、タイトルの由来を説明するところから始まる。「バーナード嬢」とは、町田が考案した自身のあだ名である。アイルランドの劇作家、バーナード・ショーの名前を勘違いして用いている⁷わけであるが、かっこいいと思われる読書に関する知識を正否に関わらずとりあえず使ってみるといのが彼女の楽しみ方の一つである。

ふざけているようにしか見えない言動がなされている一方で、町田が考える読書における楽しみには、確固たるこだわりがあることも主張されている。『あらすじでわかる世界の名作文学』を紹介した遠藤君に対して、「あらかじめ仕組まれたお

仕着せのあらすじで読んだ気になるなんて読書を冒読しているとしか思えない」「読んでない本を読んだ気になるのに楽をするな!!」と、彼女は真剣にまくしたてる。⁸ 続けて述べられた「あらすじ本を読むのって『私は読書家になるのをあきらめます』宣言を自分に下す行為だから全然気持ちよく読めない。」という言葉からは、読書に対して極めて明確な理想を描いており、それに到達できないまでも自分なりに真摯な努力を重ねていることが伺える。

町田さわ子が描く読書に対する理想がどのようなものであるか推察できるエピソードがある。⁹ プルーストの『失われた時を求めて』に挑戦した町田は、長すぎる描写にすぐさま挫折し、どんな本でも長いということ自体が一つの欠点なのではないかと疑問を呈している。そんな彼女が「人にススメたい最高に読みやすくして最高に面白い本」は『さまあゝずの悲しいダジャレ』である。一行から二行ほどのダジャレとつつこみの応酬で構成された本は、町田が日々憧れている古典的名著であるとはとても言えない。しかし、彼女は「超面白い」「大好きだ」と評して、「ガチな読書家」である神林栞に薦めるのである。

町田は、単純に読書に対して怠惰であると言うよりは、自らの主観性に極めて忠実な人間であると考えられる。古典的名著にばかり挑戦しては挫折してしまうが、彼女がそれらを選ぶのは名著だからではなく、読めると「かっこいいから」という判断による。一方、自分の感性において、「あらすじ本」や「かわいい動物の写真に、心にしみる言葉」を並べた5分で読めるお手軽癒し本¹⁰といった本に対しては強い軽蔑を示してもい

る。彼女の目的は「楽に読書すること」ではなく、あくまでも、自分なりの読書に対する理想に近づくことなのである。

したがって、自らの主観性に導かれるままに読書ができることが町田さわ子の読書における楽しみであると言うことができるだろう。興味深いことに、町田の熱弁を聞いた神林は感動し、「見栄とか関係なく好きなモノを純粹に好きって言えるのは素晴らしいな」と心中に呟いている。本当の読書家であると位置づけられ、町田さわ子と対極にあると思われる神林は、彼女のどこに感じ入るところがあったのだろうか。そこで次に、神林葉における読書の楽しみとはどういったものか検討しつつ、神林が町田を認めるに至った由縁を明らかにしてみたい。

(2)「わからない」という認識が起点となる楽しみの共有

神林葉と町田さわ子のやり取りを詳細に検討していこう。

神林葉に勧められて、「現代を代表するハードSF作家」と称されているグレッグ・イーガンの著作に挑戦した町田さわ子は、何が書いてあるか全く理解することができず、泣きながら絶望をする。そんな彼女に対し、神林はためらいつつも、実は私もよくわからないで読んでいる、そして、恐らく他のファンもわからずに読んでいるだろうし、実は作者であるグレッグ・イーガン自身もわからずに書いているのではないかという仮説を披露して見せる。神林は、イーガンはわからずとも面白い、大事なことは理解の有無に関わらず感じることができると言うのである¹²。

二人とも自覚はしていないであろうが、ここには双方の読書に対する姿勢に極めて近いものがある点を見出すことができる。すなわち、読了の有無に関わらず、自らの主観性において自分が楽しめる読書の限界を探っている町田さわ子と、理解の有無に関わらず、面白いという感覚のもとに読書を楽しんでいる神林葉という極めて近い姿勢がここに見られるのである。

対極の位置にあると考えていた町田が、実は、読書の楽しみ方において非常に近い存在であるということを神林は次第に自覚するようになる。ここで、神林が町田さわ子に宛てて書いた手紙の文面をここに引用してみよう。

私は最初町田さわ子が嫌いでした。(中略)今はもう慣れたというか町田さわ子のそういう姿勢に、時々ある種の純粹さのようなものを見出してしまっています。時々ですよ。世の中には、知っているのに知らないフリをして他人を試したりする物知りで頭のいい人がいます。そういう人間と比べたら私は町田さわ子のほうが好きです¹³。

町田さわ子の「読まずに読んだことにする」という姿勢に最も腹を立てていたのが神林葉であった。しかし、この手紙を書いた時点で神林は読了の如何ということあまり問題にしている。「読まずに読んだことにする」という行為にごまかしを感じるのではなく、むしろ、「わからない」という認識に正面から向き合っている町田さわ子に「純粹さ」を感じるに至っている。

神林の使う「純粹さ」という表現は何を意味しているのだろうか。先に引用した、「見栄とか関係なく好きなモノを純粹に好きって言えるのは素晴らしいな」という神林の台詞を参照すれば、それは主観性を重んじる態度を意味していると考えられる。すなわち、「見栄」という言葉に現われているような他者からの評価を期待する、客観性を帯びた概念と対置されているのが「純粹さ」という表現である。「わからない」「好き」といった感覚はいずれも主観性に由来するものである。したがって、自らの主観的判断によって読書を楽しもうとする町田さわ子のような人間こそ、楽しみを共有できる人間として認めることができた、と解釈することができるだろう。

神林菜ほど明確ではないが、遠藤君、そして長谷川スミカについても、町田に対して徐々に共感を抱いていく過程を見ることができ¹⁴。そして、町田の存在をきっかけとして、個別に読書を楽しんでいた四人は相互に関わりあうようになる。町田さわ子における主観的なこだわり、そして「わからない」という意識を自覚的に維持していることと、四人の交流が生まれることは、果たしてどのような関係にあるのだろうか。次項では、四人の関係を通して描かれる、読書における楽しみについて見ていくこととしたい。

(3) 「開かれた主観性」によって支えられている交流と発見の場

「わからない」という認識をきっかけとして生まれる交流は、

まず、ごく単純に読書家ぶるために必要な要素は何かについて、町田さわ子が周囲に熱心に聞いて回っていることから成立している。

町田の熱心さにほだされて、三人はそれぞれに考えさせられてしまう。そして、実際は聞かれていた自身にも「わからない」ことがあるのではないか疑問を感じるようになる。先に挙げた、イーガンがわからないと町田さわ子に泣きつかれた神林がそのいい例であると言えるだろう。他にも、シリーズズやスピノフといった本を読むときに適切な順番はあるのか¹⁵、内容を理解できなくとも宮沢賢治ファンは名乗れるのではないか¹⁶、といった問いが誘発されている。個々バラバラに読書を楽しんでいた彼らは、町田がその場にいるかどうかに関わらず、読書についての他愛もないことをテーマに会話を楽しむようになる¹⁷。漫画『バーナード嬢曰く。』からは、町田さわ子だけが維持していた「わからない」という意識、そしてそこから生まれた「知りたい」という熱望が周囲を刺激し、交流の場が自然と成立していく様子を見ることができ¹⁸。

そのような交流の場から、読書家らしい振る舞いを再発見して、さらに楽しんでいるのが町田さわ子である。神林と長谷川スミカが、お互いに本を勧め合っているのを見て「いかにも読書家同士ってカンジのやり取り：カツコイイ!!」と感動したり¹⁸、おもしろいSFが再版されずに価格が高騰していることを嘆いている神林を見て、「定価で買っといてよかった」という言い回しを自分も使ってみたいとせがんだりしている¹⁹。本人たちにとっては全く無自覚な日常的振る舞いから、自分なりの

意味づけを見出す町田の楽しみ方は、捉えようによっては新しい認識や発見をもたらすものであると言えるかもしれない。

交流を支える「わからない」という認識、「知りたい」という熱望、そして新たな意味づけの発見は、いずれも主観的なものに他ならない。したがって、主観的な感覚において最も優れているのが町田さわ子であり、交流から生まれる楽しさは町田さわ子の主観性によって生み出されていると結論付けることができるだろう。本稿では、既知を確定せず「わからない」という認識を自覚し、維持し続けることで交流や発見をもたらす町田さわ子のような主観性の在り様を「開かれた主観性」と呼ぶこととしたい。そこで次章では、漫画『バーナード嬢曰く。』において見出された「開かれた主観性」が読書における楽しみを支えるという仮説について、小林秀雄の読書論と対照しながら考えてみることにしたい。

第二章 小林秀雄の読書論にみられる主観性の閉鎖

(1) 小林秀雄における読書の楽しみ

第一章では、漫画『バーナード嬢曰く。』において、読書への楽しみが町田さわ子による「開かれた主観性」によって支えられていることが明らかになった。第二章では、「批評の神様」「文学の教祖」「読書の達人」²⁰と称されてきた小林秀雄の読書論と対照することで、第一章で得られた仮説をさらに検討していくことにしたい。

まず、第一章と同様に、小林における読書の楽しみについて見てみよう。小林はその著作の中で、読書の楽しみは、「文は人なり」という言葉を理解することにあると述べている。

読書の楽しみの源泉にはいつも「文は人なり」という言葉があるのだが、この言葉の深い意味を了解するのには、全集を読むのが、一番手っ取り早い而も確実な方法なのである。

一流の作家なら誰でもいい、好きな作家でよい。(中略) その人の全集を、日記や書簡の類に至るまで隅から隅まで読んでみるのだ。

そうすると、一流と言われる人物は、どんなに色々な事を試み、いろいろな事を考えていたかが解る。彼の代表作などと呼ばれているものが、彼の考えていたどんなに沢山の思想を犠牲にした結果、生まれたものであるかが納得出来る。単純に考えていたその作家の姿などはこの人にこんな言葉があつたのか、こんな思想があつたのかという驚きで、滅茶々々になつて了うであろう。その作家の性格とか、個性とかいうものは、もはや表面の処に判然と見えるという様なものではなく、いよいよ奥の方の深い小暗い処に、手探りで捜さねばならぬものの様に思われてくるだろう²¹。

人によっては、全集の網羅は並大抵のことではないと思われるが、そのような困難を「一番手っ取り早い而も確実な方法」であると位置づけているところに、小林の読書に対する明瞭な

方法意識が表れていると言える。読まずに読んだことにするために日々試行錯誤しているような町田さわ子のような人間とは、全く相入れないはずである。ただし、氏が提案する方法の明瞭さとその厳しさから、町田と似たような読書に対する強固なこだわりを見出すことは容易である。

ところで、全集を網羅することでより深い作者理解に迫るところは、小林においては、読書の楽しみにいたる前段階として考えられている。小林は、「読書百遍とか読書三到とかいう読書に関する漠然たる教訓²²」が「容易ならぬ意味を持つ²³」のは、「他人を直かに知る事こそ、実は、ほんとうに自分を知る事に他ならぬからである。人間は自分を知るのに、他人という鏡を持つているだけだ²⁴」と述べて、ここで引用した小文「読書について」の最後の二段落で次のように述べている。

書物の数だけ思想があり、思想の数だけ人間が居るとい
う、在るがままの世間の姿だけを信ずれば足りるのだ。何
故人間は、実生活で、論証の確かさだけで人を説得する不
可能を承知し乍ら、書物の世界に這入ると、論証こそ凡て
だという無邪気な迷信家となるのだろうか。(中略)

君は君自身でい給え、と。一流の思想家のぎりぎりの思
想というものは、それ以外の忠告を絶対にしてはいない。
諸君に何んの不足があると言うのか²⁵。

小林の描く「人間」は、一人一人が決定的に異なっており、その違いにおいて互いを説得するのは不可能である。したがっ

て、全集を読破するという徹底した読書によって鮮明な作者像を立ち上げらせることで、他人という「人間」と自分という「人間」が異なっていることを明確化し、自分自身に満足すること、それが、小林の読書の目的であり、楽しみであると考えていることができる。

(2) 小林秀雄の読書論における主観性のあり方

ところで、「それ以外の忠告を絶対にしてはいない」との表現に見られるような、自身が得た結論以外には何らの可能性も存在しないという断言は、第一章に見た、読書の楽しみ方、すなわち、「わからぬ」という意識を自覚的に維持し続けることによつて、探究、交流、発見といった喜びを得る可能性を排除するものでもある。小林は読書を通じた探究や発見から楽しみを得ることはなかったのだろうか。「読書の楽しみ」と題された小編には、次のように述べられている。

今日となつては、本ももう私を夢中にさせるわけにはい
かなくなつた。新しい本を読み漁るといふ事もなくなつた。
以前読んだものを漫然と読み返すといふ事が多くなつた。
しかしそういう事になつて、却つて読書の楽しみといふも
のが、はつきり自覚出来るようになったと思つている。

往年の烈しい知識欲や好奇心を想い描いてみると、それは、自分と書物との間に介在した余計なもののように感じられる。それが取除かれて、書物との直かな、尋常で、自

由な附合の道が開けたような気がしている²⁶。

「往年の烈しい知識欲や好奇心」という表現は、「開かれた主観性」という概念と同質なものとして捉えられそうである。「わからない」という自覚の有無は曖昧であるが、探究や発見を追求している点では、近いと思われる。

二つを同等なものとして置き換えると、第一章では読書における楽しみの源として捉えられた「開かれた主観性」は、小林においては「自分と書物との間に介在した余計なもの」と考えられている。要するに、小林の読書の目的及び楽しみは、自分に満足すること、である。作者という他者を確立することで、より鮮明に自己を構築することを目的とする小林にとつては、未知の状態がいつまでも続く状態では自分に満足することができないのだろう。言い換えれば、小林において、「開かれた主観性」は、書物との間を隔てる、異常で、不自由な変数を意味することになる。

ここで、二つの読書論を整理するために、第一章で位置づけた「わからない」という認識の自覚・維持を意味する「開かれた主観性」に対して、小林の、他者の像の確立と共に自己を確立し固定することを「閉鎖した主観性」と呼ぶこととしたい。

(3) 不完全性を表すものとしての「開かれた主観性」

では、小林秀雄の読書論から導かれた「閉鎖した主観性」に対して「開かれた主観性」はどのように位置づけることが可能

だろうか。「読書の楽しみ」からの引用を参照すると、「往年の烈しい知識欲や好奇心」を充たすまでが読書の楽しみを得るための前段階、そして、それが満たされた後に、確定され揺らぐことのなくなった自己によって書物と向き合う状態が読書の楽しみを得るための完成形態として考えられている。したがって、「開かれた主観性」は、「閉鎖した主観性」に到る前の、未熟で不完全なものとして位置づけられるだろう。

漫画『バーナード嬢曰く。』においても、町田さわ子の読書に対する姿勢を理解せず、軽蔑の対象とする場面はいくつか見られる。

例えば、シャーロック・ホームズの映画にはまった町田が原作に挑戦したいと考えて、シャーロキアンを自称する長谷川スミカに、シリーズのどれから読み始めるのがふさわしいか相談した場面が該当する²⁷。長谷川は、町田には全集よりも読みやすい文庫版がふさわしいと早い合点して、字が大きいジュニア向けのものを馬鹿にしたような態度で勧める。町田は、時系列で読んでみたい旨を伝え、「正しい順番で読みたいしホームズとワトソンが出会うのおもしろそー²⁸」と言うと、長谷川は烈火のごとく怒りだしてしまう。ホームズには正しい順番なんてない、刊行順だと時系列がバラバラ、さらに、町田に勧めた本は全て「ワトスン」表記で、初心者には勧めづらい『詳注版シャーロック・ホームズ全集』は「ワトソン」表記であるがその方がいいのか、と長谷川は次々にまくしたてる。

このエピソードからは、長谷川が小林秀雄と同じように全集を読破し、隅から隅まで味わうという楽しみ方をしていること

がよくわかる。また、町田にとっては、名前の表記が異なることは些末な情報に過ぎないだろうが、長谷川にとっては思わず語気を強めてしまうほどに重大な問題として扱われていることから、やはり小林と同じように、自分なりの読書の楽しみ方が確立しており、それ以外の楽しみ方を排除する傾向についても同様に表れていると言えるだろう。

小林の読書論によれば、「開かれた主観性」において得られる楽しみは、いずれ消滅するものであり、その価値は相対的にしか認められていない。しかし、小林の言う読書の楽しみに絶対的な価値を見出すべきであるとは必ずしも言い切ることにはできない。第一章に見た神林菜の例を振り返ると、彼女は、「閉鎖した主観性」から「開かれた主観性」へと、小林とは逆の方向に移行しているのである。そして、彼女はそれを退行としては全く考えていない。

第二章では、読書における楽しみの二つの形態、「開かれた主観性」と「閉鎖した主観性」を小林秀雄の読書論に基づいて二つの段階として捉えることの妥当性について検証を試みたが、反証が確認されてしまった。第三章では、読書における楽しみを論じた人物としては最高の権威の一人であると言っても過言ではないロラン・バルトの言説を手掛りに、「開かれた主観性」と「閉鎖した主観性」をめぐる新たな捉え方を探っていくこととしたい。

第三章 〈周縁的読書活動〉における「個体」的あり方

(1) ロラン・バルトにおける〈周縁的読書活動〉というあり方

町田さわり子には、自身が描く理想の読書家に近づきたいという憧れがあり、小林秀雄においては、自己を確立するための手段として読書が考えられていた。各々の読書に対する態度には、むしろ今までに論じた主観性のあり方が反映されているわけであるが、第三章では、ロラン・バルトにおいて、読書に対してどのような態度が取られ、主観性をどのように位置づけているか明らかにするとともに、三者の読書論の関係を探っていくこととしたい。

コレージュ・ド・フランスの開講講義において、バルトは、権力といかに戦い、権力からいかに逃れるかということを主題として講義を始めている²⁹。バルトは、「人間が存在しはじめて以来ずっと権力が刻みこまれているこの対象こそ、言語活動である³⁰」として、次のように述べている。

言語のうちにあっては、隷属性と権力とが避けがたく混じりあっているのである。したがって、単に権力からのされる力だけでなく、またとりわけ、誰をも服従させない力のことを自由と呼ぶなら、自由は言語の外にしかありえない。が、不幸なことに、人間の言語活動に外部はないのだ。それは出口なしである。その外に出るためには、代価として、不可能なことが要求される。(中略) 信仰の騎士「ア

「ブラハム」でもなければ、ニーチェ的な超人でもないわれわれに残されているのは、もしこう言ってよければ、言語を用いてごまかすこと、言語をごまかすことだけである。たえず変遷回帰する言語活動の輝きにつつまれた、権力の外の言語を聴き取らせる、この健全なごまかし、この肩すかし、この壮麗な畏、私としては、それを文学と呼ぶのである³¹。

バルトは、「ある実践、書くという実践が残す痕跡からなる複合的な書き物³²」を総称して「文学」と呼んでいるため、ここで論じている読書と等置することは十分に可能である。したがって、バルトの読書における動機、態度、目的は、言語が内包する隷属性と権力から逃れ、「ごまかし」によって自由に接近することであると考えることができるだろう。

バルトは、権力から逃れた「間接的なものとしての地位³³」を獲得しているからこそ、文学にはあらゆる学識が含まれていながら、「さまざまな知を循環させ、そのどれをも固定したり、物神化したりしない³⁴」と述べる。このような知のあり方は、小林秀雄における読書のあり方とは全く異なるものであると言えるだろう。小林の読書は、他者を確定し、自己を確立・固定する。一方で、バルトにおいては、文学によって示される知は、自己や他者といった明確な認識の形を取らない。

言表行為³⁵は、言語活動が、含意や効果や反響や紆余曲折や歯型の段階からなる広大な光量であることを認める。

言表行為は、ある主体の声を聞かせることを引き受けるが、その主体は、自己主張しているのに、それを見定めることはできず、未知のものであるが、しかし不安な親しさによってそれと知られる。語はもはや、錯覚によって単なる手段と見なされるようなことはなく、発射、爆発、振動、仕掛け、味わいとして送り出される。エクリチュールは知の祝祭をおこなうのだ³⁶。

「含意」「効果」「反響」「紆余曲折」「歯型」といった多種多様な比喩は、すべて、何らかの存在が残した痕跡にすぎず、何が存在したのかさえ明確ではない。自己主張の声は聞こえても、その主体は目にするできないという。

この捉えどころのない言説を、町田さわ子の読書に対する姿勢と比較してみよう。「わからない」という留保の状態を保っている点で両者は非常によく似ているが、明確に異なる点がある。それは、両者が行っている「わからない」という状態への意味付けである。第一章に示した町田の読書に対するこだわりを振り返ってみると、彼女は読んでない本を読んだ気になるのに楽をしてはいけなさと述べている。彼女にとって読めないことは、諦めであり、諦めを経た読書には苦節が必要なのである。

ところが、バルトの場合、曖昧さは自由への近道である。自己や他者といった明確な認識に至ることを回避し、自己主張しているにもかかわらず姿を捉えることのできない主体にバルトは決してたどり着くことがない。しかし、その道筋は「発射、爆発、振動、仕掛け、味わい」という刺激に富んだものである

らしい。「主体の欠在³⁷⁾」という状態を積極的に肯定し、求め続けることによってこそ、バルトにおける読書の楽しみは獲得されていると言えるだろう。このような、中心に至ることのないバルトにおける読書のあり方を、本稿では〈周縁的読書活動〉と呼ぶことにしたい。

(2) ロラン・バルトにおける主観性のあり方

では、バルトにおける〈周縁的読書活動〉において、主観性のあり様はどのように認めることができるだろうか。主観性の在処である主体そのものが「欠在」しているところに快楽が見いだされるとバルトは述べているが、その点を我々はどうのように理解することができるだろうか。

「テクスト」は「織物」という意味だ。しかし、これままで、この織物は常に生産物として、背後に意味（真実）が多かれ少なかれ隠れて存在するヴェールとして考えられてきたけれど、われわれは、今、織物の中に、不絶の編み合わせを通してテクストが作られ、加工されるという、生成的な観念を強調しよう。この織物——このテクスチュール〔織物〕——の中に迷い込んで、主体は解体する。自分の巣をつくる分泌物の中で、自分自身溶けていく蜘蛛のよう³⁸⁾。

隷属性と権力から逃れた言語としての「テクスト」は、常に

流動的、持続的に、生成され加工され続けているという側面が指摘されている。「テクスト」を読む主体は、生成に巻き込まれ「テクスト」を生成する一過程となる。すなわち、これがバルトの意味する「主体の欠在」という状態であり、それは主体の消滅や不在を意味してはいない。

バルトは続けて、主体は解体されたのち、再度戻ってくるという言葉。

その時、おそらく主体がまた戻ってくる。幻覚としてではなく、フィクションとして。ある種の快楽は、自分を個体として想像し、自己同一の虚構性という、稀なフィクションの中でも、最も稀なフィクションを案出するという仕方
で導き出せる。このフィクションはもはや単一性の幻覚ではない。逆に、われわれの複数を登場させる社交の舞台である。われわれの快楽は個体的である——が、個人的ではない³⁹⁾。

戻ってきた主体は、もはや「テクスト」に接触する以前の主体ではなく、「テクスト」と完全な分離がなされた主体でもない。テクストの生成過程に巻き込まれた主体の状態を、「フィクション」という巧妙な表現に託していると思われる。

さて、「フィクション」としての主体に登場する「複数性」とは、どのようなものだろうか。「フィクション」としての主体は、「テクスト」と混じりあっている点において複数性があると解釈することもできるが、この点についてさらに詳しく述べられてい

る次のような記述がある。

テクストは物神だ。この物神は私を欲する。テクストは、語彙、参照物、読みやすさ、等々、見えないフィルターや選別板を配置して、私を選ぶ。そして、テクストの中に紛れて（機械仕掛けの神のように、うしろにいたのでない）、いつも他者が、作者がいる。

制度としての作者は死んだ。彼の公民的、情念的、伝記的人格は消滅した。王位を失った彼の人格はもはや作品に対して恐るべき父性を發揮することはない。文学史や教育や世論はこの父性の物語を、手を変え、品を変え、作り上げてきたものだ。しかし、テクストの内部に、何らかの形で、作者を私は欲する。私は彼の形象（彼の表象でも、投影でもない）を必要とするのだ。彼が私の形象を必要とするように⁴⁰。

バルトにおいて、「テクスト」は言語の権力及び隷属性から逃れているため、「制度としての作者」は、抹消されている。しかし、「テクスト」に巻きこまれた主体がフィクションとして戻ってくるのが可能であれば、同様に、「作者」もフィクションとして、「テクスト」の生成——すなわち「社交の舞台」——に参加することは可能だろう。

〈周縁的読書活動〉の成立のためには、「活動」の語が意味するところでもあるが、継続的に流動し続けることが肝要である。バルトの指摘において興味深い点は、「テクスト」を読む主体

だけでなく、「作者」、そして「テクスト」そのものまでもが、流動性を自ら「主体」的に欲しているということである。「複数性」は現象として見出されるわけではなく、権力と隷属性から逃れてはいるものの、常にそれらの危機に脅かされている「テクスト」が、「テクスト」として成立し続けるために、切実な必然性を込めて「欲望」されるべきものであったということだろう。

「複数性を登場させる社交の舞台」において発現する快樂について、バルトは、「われわれの快樂は個体的である——が、個人的ではない」という表現を用いている。極めて強固且つ自覚的な認識によつて、「主体の欠在」を保ちそこから快樂を得ようとする読書に対する姿勢を、本稿では、バルトの言葉を借りて「個体」的あり方と呼ぶことにしたい⁴¹。

（3）「開かれた主観性」における「個体」的あり方

バルトにおいては「個体」的あり方のもとに〈周縁的読書活動〉がなされているという結論を得たが、この結論から「開かれた主観性」と「閉鎖した主観性」の関係はどのように捉えられるだろうか。

「開かれた主観性」のもとになされる既知を確定せず、未知の持続のもとに発見や交流を楽しむ一方は、「主体の欠在」のもとに流動性を確保する「個体」的あり方に対して非常に類似していると言えるだろう。一方、「閉鎖した主観性」においては、主体が明瞭な像を結んでおり、かつ、その主体は「テク

スト」とも「作者」とも決して混ざり合うことがない。第二章では、「開かれた主観性」と「閉鎖した主観性」を段階のもとに捉えようと試みたが、第三章での検討を経た後であれば、両者は明確に対立していることがわかる。

小林よりも町田の方が、読書における楽しみの性質がバルトに近いと言えることが明らかであろう。では、町田さわ子と罗兰・バルトの関係はどのように捉えられるだろうか。

主観における開放性という観点から両者を見たとき、バルトの権力に対する距離の置き方は尋常なものではない。一方で、町田さわ子は自分自身に振るわれる権力にすら、自身を解放している。すなわち、自分を軽蔑の対象とする長谷川スミカや町田の読書に対する姿勢を軽んじることの多かつた神林菜や遠藤君を相手にしたときも、容易に自身の楽しみ——バルト風に言えば快樂——を見出すことが可能なのである。興味深いことに、バルトが述べる「複数性を登場させる社交の舞台」は、町田の場合、フィクションではなく現実には、多種多様な読書を楽しむ四人が集い、交流を楽しむ場として成立している。

「複数性」という言葉の意味を町田流に解釈するとき、「主体の欠在」という語の意味も異なってくる。「主体」は、現実の人間、すなわち読者を示すことになる。その意味を解釈するにあたって、もう一度バルトを参照してみたい。

快樂が宙吊りにする力については、どんなに強調してもしすぎることはない。それは真のエポケーだ。公認された（自分自身が認めた）あらゆる価値をはるか彼方で凍結さ

せる停止だ。快樂は中性（悪魔的なものの最も倒錯的な形式）である。

少なくとも、快樂が宙吊りにするのは意味された価値である。すなわち、（正しい）「立場」だ⁴²。

エポケーとは、「何事についても確実な判断は下せぬから判断を留保しなければならぬ」という態度⁴³を意味する。一見して、町田もバルトもともにそのような態度を取っていると思われるが、バルトは自分が選んだ「（正しい）『立場』」を宙吊りにしたことがあるだろうか。自身がわからないという宙吊りの状態にあることに日々葛藤している町田に対して、権力に対する確固たる拒絶を主張し、そのような立場を疑ったことのないバルトは「主体の欠在」、すなわち自己の立場を留保するという状態に耐えることができなかったとも捉えられるのである。そうであれば「主体の欠在」を積極的に肯定し、「周縁的読書活動」を実践しているのは、むしろ、町田であることになる。

このように解釈すると、自己の内側、フィクションの中だけで「複数性」に接しているバルトの主観性は、町田に比べれば狭量と言える。読書家たちが町田さわ子に思わず魅了されてしまふのは、誰よりも主観における開放性が強い彼女がもたらす「テキストの快樂」が、小林秀雄はもちろん、罗兰・バルトよりも秀でていたからである、と考えることができるだろう。

実際、バルトに限らず、誰にとっても己の無知を受け入れることは容易ではないが、哲学することの快樂によって小さま

さまざまな学派の祖となる若者たちを魅き付けた「複数性」の泰斗ソクラテスの言葉を借りて、本稿を締めることとしよう。

人間たちよ、おまえたちのうちで、いちばん知恵のある者というのは、誰でも町田さわ子のように、自分の知恵に對しては、実際は何の値うちのないものなのだとということを知った者が、それなのだ⁴⁴

バルトは「テクストの快楽については、どんな《論文》も書けない⁴⁵」と言う。しかし、町田さわ子が与えてくれる読書についての示唆は、決して弱いものでも軽んじられるべきものでもないだろう。いみじくも、ソクラテスの実践がそれを示してくれている。

注

- 1 施川ユウキ、『バーナード嬢曰く。』②、『一迅社、二〇一五年、四頁
- 2 施川ユウキ、『バーナード嬢曰く。』一迅社、二〇一三年、五三頁
- 3 同書、一五頁
- 4 同書、九二頁
- 5 同書、四八頁
- 6 同書、一六頁
- 7 同書、四頁、あるいは、一三頁参照

- 8 前掲書1、二五頁
- 9 同書、二六頁
- 10 同書、五七頁〜六二頁
- 11 同書、六二頁
- 12 前掲書2、五五頁〜五九頁
- 13 前掲書1、八三頁〜八四頁
- 14 「ちゃんと読め」とつつこみを入れていた遠藤君が読まずに読んだことにする工夫について考察してしまうというシーンがある（前掲書2、六八頁）、長谷川スミカについては、そもそも関わり自体少なかったが、徐々に他三人の会話に参加するようになっていく。
- 15 施川ユウキ、『バーナード嬢曰く。』③、『一迅社、二〇一六年、三八頁では、『高慢と偏見』を読まずに、そのパロディである『高慢と偏見とゾンビ』を読もうとする町田に対して文句を言いたいにもかかわらず、神林自身もジェイン・オースティンの作品を読まずに『ジェイン・オースティンの読書会』を先に読んだ経緯があったため、何も言えなかったというシーンがある。
- 16 前掲書1、二〇〜二二頁
- 17 一番読書がはかどる読書スポットはどこか、寝ながら読書をする時一番楽な姿勢は、女子が読んでいたらモテそうな本は、といった話題について話しあっている。（同書、それぞれ、三〇頁、三六頁、四二頁）
- 18 同書、三四〜三五頁
- 19 同書、八六頁〜八七頁

- 20 小林秀雄、『読書について』、中央公論新社、二〇一三年、一七五頁、木田元による解説から引用
- 21 同書、一一頁〜一二頁
- 22 同書、一四頁
- 23 同書、一四頁、一五頁
- 24 同書、一五頁
- 25 同書、二二頁
- 26 同書、六四頁
- 27 前掲書1、四五頁〜四七頁
- 28 同書、四六頁
- 29 ロラン・バルト、花輪光訳、『文学の記号学』、みすず書房、一九八一年参照
- 30 同書、一二頁
- 31 同書、一六頁〜一八頁
- 32 同書、一八頁
- 33 同書、二二頁
- 34 同書、二〇頁
- 35 「科学の言説——あるいは、科学のある種の言説——によれば、知とは言表「されたもの」である。が、エクリチュールにおいては、知は言表行為である。」(同書、二三頁)
- コレージュ・ド・フランスの講義において、バルトは「私が文学のなかで何よりも目指すのは、テキストである」と述べつつも、「言語の内部において、言語と戦い、言語を脇にそらせてゆかなければならない、それも、言語を手段とするメッセージによってではなく、言語を舞台にしてお

こなわれる語の戯れによって、そうしなければならぬ」という必要性から、「私は無差別に、文学、またはエクリチュール、またはテキスト、と言うことができる」と述べている。したがって、引用部分、また本稿においても扱われるタームはしばしば変化しているが、それが意味するものについては一貫しているということをご指摘しておく。(同書、一八頁〜一九頁参照)

36 同書、二三頁

37 「言表は、言語学の通常の対象であり、言表する主体の不在の産物として与えられる。言表行為とはいえば、主体の位置とエネルギー、さらには主体の不在をあらわにする(それは主体の不在ではない) ことによって、言語活動の現実そのものを示す。」(同)

38 ロラン・バルト、沢崎浩平訳、『テキストの快楽』、みすず書房、一九七七年、一二〇頁

39 同書、一一七頁 因みに、注38の引用は断章形式で示された本著作の「理論」の項目から。また、この引用は「主体」の項目から行っている。「主体」の引用の前略部分は次の通り。

「様々な方向から探究されているのは、唯物論的な主体の理論を確立することである。この探究は三つの段階を経ることができ。まず、それは、古い心理学の手法を借りて、想像上の主体が取り巻かれている幻覚を無慈悲に批判することができ(古典的なモラリストがこのような批判に卓越していた)。次に——あるいは、同時に、もっと先へ進み、

純粹な交替、ゼロとそれの消滅の交替として描かれる、主体のめくるめく分裂を認めることができる。(これはテキストに関係がある。悦楽はテキストの中で自分を語ることでできないけれど、自分の消滅の戦慄をそこによぎらせるからである)。最後に、それは主体を普遍化することができる(《多様な魂、死すべき魂》——主体を大衆化、集団化しようというのではないけれど。ここでもまた、テキスト、快楽、悦楽が見いだせる。《解釈するのは一体誰だ」と問う権利は誰にもない。それは力への意思の形式である解釈そのものだ。それは情念として存在する(《存在》としてではなく、過程として、生成として)《(ニーチェ)》

「主体の理論」の構築の過程における主体の消滅の過程は、テキストの中に迷い込む際の主体の解体の過程に関係しているのと取ることができると考え、引用を配置した。

40 同書、五一頁〜五二頁

注39の引用の次のパラグラフの出だしにおいても「私に快楽を与えたテキストを《分析》しようとする時、いつも私が見出すのは私の《主観性》ではない。私の《個体》である」という表現が用いられている。(同書、一一七頁〜一一八頁)ただし、注35にも示したように、「個体」という語に常に同じ意味付けが付されているとは限らない。バルトは次のように述べている。

「矛盾しながら平然としていられる者がいるだろうか。ところが、このような反英雄は存在するのだ。それは快楽を味わいつつあるテキストの読者だ。だから、聖書の古い神

話は裏返される。言語の混乱はもはや罰ではない。主体は手をたずさえて、働く言語活動の共存によって、悦楽に近づくのだ。テキストの快楽、それは幸せなバベルだ。(快楽／悦楽)。用語はまだ確定していない。私も間違え、混乱する。いずれにせよ、いつまでも曖昧な部分が残るだろう。使い分けたからといって、はっきり区別したことにはならない。パラダイグムは軋むだろう。意味はすぐに取り消されたり、取り替えられたりするだろう。言述は不完全なものとなるだろう」(同書、六頁〜七頁)

バルト本人が言述が不完全であることを認めている点において、また、チームを確定させないことによって権力から逃れ自由を行使しようと試みている点において、チームの不確定は免れえないと言える。

42 同書、一二二頁〜一二三頁

43 同書、一五〇頁

44 プラトン、田中美知太郎訳、「ソクラテスの弁明」『プラトン全集第1巻』、岩波書店、一九七五年、六六頁より。なお、原文では「町田さわ子」の部分が「ソクラテス」となっている。

45 前掲書38、六四頁